

## 「志布志の顔つき」～調査研究報告書刊行にあたって～

志布志町は比較的によくマスコミに登場する町である。志布志湾があって志布志港があり、古くから大隅半島東部地域の拠点であったせいで、ひとや物資の往来が他よりは盛んな所である。それだけ話題になる事象が多いのだろう。この数年は既存の商店街の衰退にまつわる報道が目立った。

そういう土地柄だが、「志布志」の名を列島中に広めたのは1970年代からの工業開発計画であろう。「新大隅開発計画」という名の工業化プランは、志布志湾岸をほとんど全域にわたって埋め立てて日本有数の工業地帯を創出しようというプログラムで、大規模石油コンビナートをはじめ鉄鋼、造船、機械、食品加工等々が立地する一大工業地帯がここに出現するはずだった。逮捕者が出るほどの強い反対運動が繰り広げられ、一方では推進運動も活発に展開された。日本最後の大型工業開発計画として全国の注目を浴びたのは、まだ記憶に鮮明である。そのキーワードが「志布志」であった。

志布志に行くと、新しくできた港界隈の変貌に目を見張る。客船さんふらわあが発着し、大型の貨物船がコンテナを積み下ろししている。家畜用の飼料が大量に陸揚げされているすぐ後ろでは、巨大な飼料工場が操業中だ。その港のすぐ南側にはさらに大型の港湾を造る計画が進行中で、埋め立て工事が始まっている。一方、町役場に近い商店街を歩くと、すでに転廃業した商店やシャッターの締まったままの商店が目につく。農村部では高度成長期から人口減少が続く。そこでは2000年3月末で小学校が1つ閉校になるという報道もあった。

このような、いくつもの顔を持つ志布志町を、県立短大地域研究所の総合研究プロジェクトとして1998年度から2年間調査した。そのまとめをしたのがこの『地域調査研究報告』である。調査は、主として産業・経済・社会・町財政などの現状を分析検討した部門と、地域の食生活や老人食あるいは食の伝統等を調査分析した食文化の部門から成る。時間の制約や研究員個人が日常の業務で多忙だった等のために十分な調査研究をなしえなかったうらみが残るし、総合研究の体をなしていない反省があるが、志布志の現在の姿に触れて現状を理解する報告になるよう努めたつもりである。

当地域研究所の総合研究プロジェクトは、これまでに肝属郡佐多町と伊佐地域（大口市、菱刈町）を対象にしたものがあり、志布志町で3回目になる。それぞれ「経済と社会」「生活と文化」「文化風土」を調査研究の対象として本学教員である研究員が取り組んだ。

地域には当然のこととしてそれぞれ特性がある。それを生かして地域の振興に活用していくことが地域の課題である。しかし、地域の特性をいかに有効に生かしていくかは実は難題である。調査に携わってみて、そのことを痛感している。同時に、鹿児島県の各地域が置かれている現状について、改めて感じる場所があった。地域研究所という大学の一機関がそういう課題にいかにかかわるのか、これからも十分に考えていかねばならないという思いをつよくしている。

2000年3月31日

鹿児島県立短期大学

地域研究所長 高 嶺 欽 一